

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第73号 平成25年3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



マーブリング・キッズ像

## 彫刻に出会う

中央図書館の入口へとつづく大倉山公園のエントランス広場では、花々に囲まれて、一体のオブジェが来訪者を出迎えています。

神戸市では一九六〇年代後半より「花」「緑」と並んで「彫刻」がまちづくりに積極的に取り入れられるようになりました。人間環境都市宣言（昭和四七年）以降、文化的な景観づくりは政策の一環として明確に位置づけられています。

須磨離宮公園では昭和四三年から隔年で十五回にわたり現代彫刻展が開催され、優秀作品は市内の「みどり」と彫刻のみち」（湊川神社西側）や「花と彫刻の道」（三宮）などに設置されてきました。

『彫刻のまち神戸』（昭和五四年刊）によると、兵庫県内には野外彫刻が多く、神戸市内だけでも百点以上にのぼるそうです。なかには「マーブリング・キッズ像」（メリケンパーク）のように、海外の提携機関や姉妹都市から寄贈された彫刻もあります。

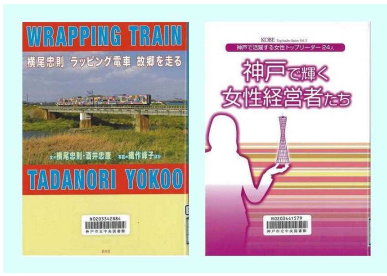
具象から抽象まで様々な意匠を凝らした作品が、今日も街中で素敵な出会いを待っています。

神戸で輝く女性経営者たち―神戸で活躍する女性トップリーダー24人交友プランニングセンター編著（友月書房）

神戸で活躍する女性経営者24人へのインタビュー集。取り上げた業種は、帽子販売、レストラン船、靴の製造販売、観光支援、シユシユの製造販売、ラーメン店、パソコンソフト制作、心理療法カウンセリング、歯のホワイトニング、清掃業など多岐にわたる。

それぞれの経営者たちが独立して今の仕事を志すようになったきっかけや、仕事で得たもの、神戸に対する想い、多様な人脈づくりの秘訣などをテンポよく引き出していく。

二四人という数字を取り上げた理由について編者は「平成二四年に二四時間眠らない神戸の魅力を伝えたい」と述べている。



横尾忠則ラッピング電車故郷を走る 横尾忠則・酒井忠康文 織作峰子ほか写真（淡交社）

昨年十一月までJR加古川線で、著者のデザインによるラッピング電車が運行していたことをご存じだろうか。本書はその八年間の軌跡をまとめた写真集である。

たくさんの「目」に彩られた「見る見る速い」や赤い星雲が印象的な「銀河の旅」など、計四種類の車両がのどかな田園風景の中を走る勇姿は、まさに圧巻である。車両はなくなつたが、みんなの記憶の中で走り続けることだろう。

蛭子神社本殿御造営記念誌 蛭子神社編・発行

柳原えびす神社とも呼ばれる蛭子（ひるこ）神社。創建年代は不明だが、記録に残る文化八年（一八一）造営の本殿は昭和二〇年の空襲で焼失した。昭和二五年に再建されたが、阪神・淡路大震災で被害は少なかったものの老朽化が進み、建て替えが決定され、平成二二年、無事新本殿が完成した。本書は、御造営事業をはじめ、わずかに残された資料や写真をまとめた貴重な記録誌になっている。



夜明けのハンター―文明開化物語 三条杜夫（叢文社）

王子動物園内にある国の重要文化財旧ハンター邸や、北野のハンター坂などに今もその名を残すE・H・ハンター。彼は明治初めに英国から来日し、大阪鉄工所（現日立造船所）の創業をはじめ、様々なビジネスを通じて日本の近代化に貢献した。本書はその生涯を描いた歴史小説で、「月刊神戸っ子」に長期連載された。

各章ごとに「兵庫誕生」や「コーベビーフの発祥」・「日本初の映画上映」などの小見出しが掲げられ、歴史的事件の裏話や、この時代に生まれた多くの事物に関するエピソードも満載。神戸の歴史雑学本としても大いに楽しめる。

紫式部なんか怖くない 安水稔和（編集工房ノア）

紫式部を主人公としたミュージカルのタイトルを書名とする本書には、このほか「今昔物語」を元にした「盗人志願」など、一九七二年から八〇年にかけて劇団神戸によって上演された舞台の台本三本が収録されている。

詩人である著者は、詩の延長線上でラジオドラマの作品を書き、さらにその延長線上で書いた舞台のための作品もまた私の「詩」である、と語る。

ひょうこのロングセラ―115 神戸新聞経済部編（神戸新聞総合出版センター）

兵庫県生まれで長く売れ続けているモノやサービスを紹介する神戸新聞の連載をまとめた一冊。

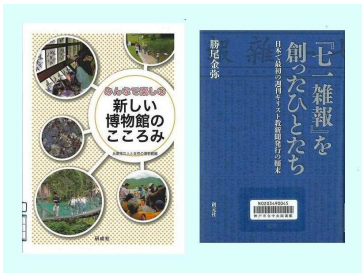
和菓子やソースなどの身近な食にまつわる商品から日用品、工業用品、機械、サービスまで一商品見開き二ページで、どこからでも気軽に読める。なじみの深いもの、これも兵庫県で作られていたのかと驚かされるもの、それぞれの持つ物語性により新たな発見を読み手に与える。

『七一雑報』を創ったひとたち—日本で最初の週刊キリスト教新聞発行の顛末 勝尾金弥(創元社)

『七一雑報(しちいちざっぽう)』は明治八年に神戸で創刊されたキリスト教系新聞。その名のとおり七日に一度発行される週刊新聞であった。

漢文調の文章が主流であった明治初年というこの時期に「為になる教え」・「外国の模様」などを「解りよく平たい語(ことば)」(創刊号解説)で説いた進歩的な新聞である。この新聞は小田原出身の村上俊吉と金沢出身の今村謙吉により創刊され、誌名をかえ明治十八年まで続く。

二人を育てた明治という時代と多くの人々、二人が神戸で邂逅し、創刊に至るまでの歩み、さらにこの新聞が育て、現在の出版界にも継承される系脈をたどる。



みんなで楽しむ新しい博物館のこころみ 兵庫県立人と自然の博物館編 岩槻邦男ほか著(研成社)

人と自然の博物館、通称「ひとほく」の二〇年間の活動をまとめたもの。博物館といえは資料や標本の収集と展示というイメージが強い。生態や環境を含めた人と自然のかかわりをテーマとする同館では、研究機関や専門家集団としてのシンクタンク機能を活かし、他の団体とも連携するなど従来の博物館の枠を越えた多彩な試みが行われている。自然系博物館のあり方を問う一冊である。

災厄と身体—破局と破局のあいだから 季村敏夫(書肆山田)

著者は阪神・淡路大震災の体験を言葉にして表現することでとらえ直してきた。この本はそれらを東日本大震災の後に書かれた文章とともに構成したものである。

出来事の意味は「遅れてわかる」とする著者の思索は東日本大震災を機に、幾重にも重なった記憶の層を捲ってゆく。その言葉は決して饒舌ではないが、さきの大震災とは無縁でいられない私たち自身にも、静かに強く響いてくる。

II その他の新刊 II

三世紀企業の魂—老舗企業の「決断力」とは 森崎歳章(ダイヤモンド・ビジネス企画)

雁帰る 池間久志(編集工房ノア)

地域再生7つの視点 かしのたかひと 山口裕史(カナリア書房)  
神戸キモノ物語—糸川禎彦・素敵の軌跡 糸川禎彦(ハースト婦人画報社)

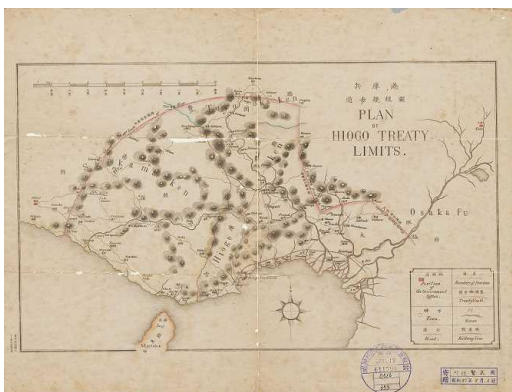
伊川谷道遺 白井眞貫(ウエップ)

書庫探訪 その29

『兵庫港遊歩規程圖』 明治8年(1875)

本図は、兵庫港の居留地に住む外国人が自由に移動できる区域を示す図です。安政5年(1858)の日米修好通商条約により、兵庫は「京都から十里(約40キロメートル)以内には立ち入りを許さない。その方角を除き、兵庫から各方向へ十里を越えてはならない」とされました。

兵庫県は明治2年(1869)に「外国人遊歩規定」を公布し具体的に区域を定めましたが、外国人とのトラブルが絶えなかったため、同7年(1874)12月、神奈川県の場合にならって地図を作製し、各国領事に配付しました。



東は京都と大阪の遊歩区域が交わるので別に境界を定め、西は多可・加西・印南の三郡、北は多紀の各郡を区域内とし、図ではピンク色の境界線で示されています。この区域を越える場合には、「内地旅行免状」というパスポートのようなものが必要でした。

村野藤吾と神戸

戦前から昭和を通じて活躍した、ひとりの建築家の業績が近年再評価されています。その建築家とは村野藤吾（一八九一—一九八四）。九州の出身ですが主として関西を中心に活動していました。

村野藤吾の名前を聞いて、すぐにその建築作品を思い浮かべられる人は多くないかもしれません。しかし、彼の作品は大阪・神戸・阪神間に散在しており、見たことのある人は少なくないと思います。

たとえば、平成十五年まで大阪の心斎橋にあったさこう百貨店は、すぐ隣に建つ大丸百貨店（ヴォーリス設計）と並んで、御堂筋を通る人の目をひいたものです。また、阪神・淡路大震災で損傷を受け解体されましたが、三宮駅前にあった神戸新聞会館も、村野の設計によるものでした。現在も残っている建物としては、東灘区の山手に建てられた甲南女子大学の校舎群があり、甲南女子中・高等学校の校舎と共に村野の作品です。

村野藤吾は佐賀県唐津に生まれ、早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節建築事務所に入所し、昭和四年（一九二九）に独立するまで渡辺の下で設計活動をしていました。

しかし、大学を出たばかりの村野には建築の実務経験がまったたくなく、当初凶面が引けないなど非常に悩んだ時期がありました。彼に大きな転機を与えたのは、神戸海洋気象台の設計競技（コンペ）でした。ここで作品が認められたことで自信が付き、数年後には、同事務所のデザインのほとんどを担うまでになりました。神戸港を見下ろす丘の中腹に建てられた白いモダンな気象台は、見る人に神戸のハイカラさを印象づけたことでしょう。しかし、第二次世界大戦の爆撃によって二階以上を破壊され、残った部分が改修によって別館として使用されていきましたが、阪神・淡路大震災後に気象台が移転した際、取り壊されました。

彼は九三歳で亡くなる直前まで第一線の建築家であり続け、多くの建物を設計しました。しかし、これが村野藤吾の設計ですと一言でいえるような特徴がありません。主義や形式にとらわれない、自由なデザイン

こそが彼の持ち味だといわれています。

また、彼は建築の九九%までは組織とビジネスの要求が決める、そして村野の表現が残るのは1%だと考えていました。



横尾忠則現代美術館（灘区原田通）

たとえば、昭和十一年（一九三六）の大丸神戸店増改築に際して、ある重役は村野に「商売は自分がやるから、箱を作ってくれ」と依頼したといえます。村野はその要望をいれ合理的かつ機能的な建物を設計しましたが、窓のデザインで1%の自分の独創性を主張したのです。

平成七年に起きた阪神・淡路大震災は、神戸の近代建築に大きな打撃を与え多くの建物が失われましたが、それに耐えて残った建物の中に「商

船三井ビル」（旧大阪商船神戸支店）があります。旧居留地にあるこの建物は、渡辺節建築事務所時代に村野が設計に関わった作品のひとつです。

また、平成二四年、灘区に横尾忠則現代美術館がオープンしましたが、これは村野が設計した旧兵庫県立美術館の西館を改装したものです。広々とした前庭、緩やかなスロープなど、リニューアル後も元の設計が生かされた明るくモダンな建物となっています。

この美術館の北側には、赤レンガが美しい神戸文学館（旧関西学院チャペル、ウイグノール設計）があり、国の登録有形文化財に指定されています。神戸文学館の隣にある王子動物園内には、北野町から移築された異人館のハンター邸（設計者不詳）もあります。

このあたりは昔、原田の森といわれる緑豊かな一帯でした。春風に誘われて、建築散歩を試みるのも一興ではないでしょうか。

参考文献

『村野藤吾の建築』鹿島出版会  
『村野藤吾建築案内』TOTO出版 ほか